

研究テーマ 音読指導の工夫

所属 土佐市立土佐南中学校
氏名 市原 佐知
R G J H 3

1 研究の背景

今年担当している 2 年生は、1 年の入学当初より受けもっている。2 年に進級してからも 1 年の入学以来の積極的な授業参加が維持できている。しかし、1 クラス 38 名と大人数のため、いきわたった指導ができていくかといえば「ノー」と言わざるを得ない。

授業は、発表力のある生徒を中心に活動的に行うことができる。さらに、地道な作業学習もある程度集中して継続できる。とはいえ、理解していても、作業をしない生徒や、参加したくても理解できない生徒も数名いて課題もある。また、活動がマンネリ化しがちで、意外性のある授業展開を仕組んでいく必要も感じている。

2 リサーチクエスト

教科書の有効活用。特に Reading for Communication の活動において、38 名中 25 名以上の生徒が教科書の本文を暗唱できるようにするための方策を考える。

3 予備調査

(1) CRT 分析(領域別分析と問題点) 6 月

- * 聞く活動 得点率もよく、全国レベルに達している。しかし、生徒の意識調査では、聞く活動に苦手意識を持っている生徒が 1 番多く、定期テストでもレベルを上げるとお手上げ状態になる生徒が多い。
- * 書く活動 ほぼ全国レベルに達している。授業の中でも作文活動は意欲的に取り組んでいる。
- * 話す活動 どの活動よりも得点率が低く課題が多い。
- * 読む活動 全国レベルをやや下回る。しかし、生徒自体は文章の読解はある程度自信があり、得意意識があり、授業の中では、集中してよく取り組める。

(2) 生徒の意識調査(6 月)

次の活動の中で 1 番自信のある領域と自信のない領域を書きなさい。

1 聞くこと 2 書くこと 3 話すこと 4 読むこと

集計結果

	聞く	書く	話す	読む
自信がある	8	10	3	16
自信がない	11	10	20	2

(3) 文献研究

英語教育 アクションリサーチのすすめ

4 仮説

音読活動において、教師の model reading に従い、本文をチャンクで区切って音読したり、「虫食い読み」活動を継続的に行うことによって、英語が苦手な生徒も音読がスムーズにでき、教科書が暗唱しやすくなるだろう。

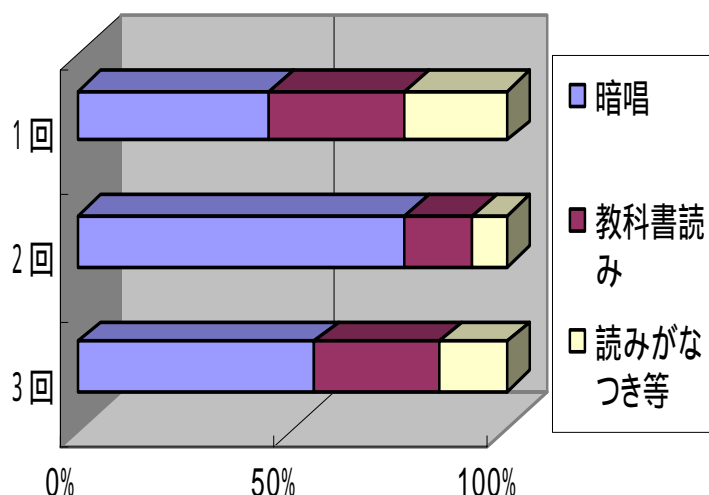
5 計画の実践

- (1) Unit 1 の Reading for Communication (以下 RC) の第 1 回音読テストの実施
- (2) Unit 3 の RC でのチャンクで区切って読むことの指導
- (3) Unit 3 の RC での「虫食い読み」のプリントを使っでの活動とアンケートの実施
学習指導案 (Unit3 Reading for Communication P.24)

- (4) 第 2 回音読テスト
- (5) Unit 4 の R C でのチャンクで区切って読むことの指導
- (6) Unit 4 の R C での「虫食い読み」のプリントを使っでの活動
- (7) 第 3 回音読テスト

6 実践の結果

- (1) 音読テストの結果



	暗唱	教科書読み	読み仮名付き等
1回	17人	12人	9人
2回	29人	6人	3人
3回	21人	11人	6人

7 結果の検証

最初は音読の声が小さく一部の自信のある生徒だけが大きな声でリードしていく傾向にあったがチャンク読みで規則的に区切って読んでいくとリズムで覚え大半の生徒がきちんと声を出し参加できるようになった。

毎回の数分の音読練習で反復練習ができ、特に2回目の音読テストでは、1回目で読み仮名に頼らないと教科書の英語が読めなかった生徒の何名かが暗唱までできていた。

「虫食い読み」やチャンク読みを導入して目新しく、しかし規則的な活動を重ねるうちに、生徒の中に見通しを立てることができるものが増えてきて、予習をし始めるものもでた。

1ページの暗唱でもの足らず2ページ暗唱してくるものや、職員室でやり直しをしたがるものもいて今まで英語を音読することに苦手意識を持っていた生徒も、暗唱してみようという意欲を持ち始めた。

8 成果と今後の課題

夏の講演の中で音読指導の重要性を再確認し、今までの指導を反省し small step ではあるが少しずつ新しい試みを重ねてきた。何とか結果を出さなくてはと思い、教師のほうがエネルギーをいつもより多く注いで取り組んでいたように思う。それが生徒に伝わるのだろう。

2回目の音読テストの日、教室に入ったとき、すばらしい光景を目の当たりにした。生徒たちが全員教科書を開いたり天井をにらんでテストの内容を練習していた。テスト前に chorus reading したときのなんとボリュームのあること。1ページを暗唱し、もう1ページ暗唱しているので聞いてほしいと言う生徒、テストでうまくいかなかったので職員室まで再度挑戦に来る生徒、生徒は英語が暗唱できることに達成感を感じていた。教室での音読の声が大きくなったことももちろん嬉しいけれど、今まで声を出さない、聞き取りにくい小さい声しか出せない生徒が机間指導の中ではっきり聞こえる声を出していたとき、生徒は変わったと思った。このプロジェクトに参加することになり、重い腰を上げて文献をあさり、授業改善の試みをスタートした。何か仕組みば、響く生徒たちだと、改めて確認した。

今後も少しでも多くの生徒が「できた」と実感できる活動を取り入れ英語学習の裾野を広げていきたい。